新潮日本古典集成

三人吉三廓初買

今尾哲也　校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第六五回）

三人吉三廓初買（さんにんきちさくるわのはつがい）

昭和五十九年七月五日　印刷
昭和五十九年七月十日　発行

校注者　今尾哲也（いまお てつや）
発行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　加藤製本株式会社

定価二六〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tetsuya Imao, Printed in Japan, 1984.

ISBN4-10-620365-0 C0395

目次

凡例……三
第一番目　序幕……一
第一番目　二幕目……八一
第一番目　三幕目……一三一
第一番目　大詰……二一七
第二番目　序幕……二五九
第二番目　二幕目……三四五

第二番目　三幕目……四一三
第三番目　大　切……四六五
解　説　黙阿弥のドラマトゥルギー……四九一
付　録
江戸三座芝居惣役者目録……五三五
狂言作者心得書……五四〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

〔底本〕

一、底本には、「讀賣新聞」本を用いた。これは、明治二十一年二月二十六日発行の第三九三九号から、同年五月十七日発行の第四〇〇六号まで、三カ月間、四十二回に亙って「讀賣新聞」紙上に連載された、最初の活字本である。

一、底本選定の理由は、これが、以下の四点において、初演本の忠実な活字化と見られ、黙阿弥自筆の横書き本ないし縦本（たてぼん）（初演台帳）の見当らぬ現在では、入手し得る唯一の善本だからである。

(1) 一番目、二番目から構成され、かつ、一番目の大詰を伝える完本である。

(2) せりふやト書きの人名が、役名ではなく、役者名で記されている。

(3) 後の活字本では、猥雑の故に削除もしくは改訂されたせりふやト書きが、原本通りと思しい状態で生きている。

(4) 場面を指定する地名が、後の活字本のように、江戸のそれに改められていない。

〔本文〕

一、歌舞伎の脚本は、上演の度ごとに、多少とも内容を変える。いわば、それは一回限りのものであ

って、他本との校合を、本質的に許さない。従って、本文の作製に際しても、敢えて他本との校合を避けた。但し、次の二本を参照し、その語句を、必要に応じて頭注に引用した。

(1)『狂言百種』本（明治二十五年十二月、春陽堂刊）。――黙阿弥自身の改訂になるとされているもので、底本第一番目の序幕及び大詰を欠く、全六幕の活字本。役者名は一切使用されず、地名はすべて、江戸の地名に改められている。

(2) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵の横書き本（頭注では『横本』と略記）。――黙阿弥旧蔵本で、三冊三十九葉が現存し、底本第一番目に該当する内容を含む筆写本。いずれも表紙には「当ル申の初春狂言　三人吉三廓初買」、裏表紙には「安政七庚申年正月大吉日　紙員〇〇葉　千秋万歳大入叶　作者河竹新七」とあり、ほぼ底本の指摘と合致する役者名を使用した、初演時横書きの面影を止める善本である。但し、以下の理由から、後の上演用に作製されたものと思われる。すなわち、①第一冊目の表紙には「第弐番目序満久　荏柄天神社内の場、同松金屋座敷の場、笹目ケ谷柳原の場、同新井橋の場」、第二冊目の表紙には「第弐番目二幕目　花水橋材木川岸の場、稲瀬川庚申塚の場」、第三冊目の表紙には「第弐番目三満久目　葛西ケ谷伝吉内の場、高麗寺裏手の場」とあって、文里・一重の件と大詰とを省いて構成され、かつ、底本の「平塚高麗寺前の場」を大幅に書き替えた「弐番目」狂言である。②たとえば、「一度ならず二丁目へ、再び帰り新参者」（七六頁）というせりふが、「もふこふなつたらこつちも武士」となっていたり、「名に負ふ富士の大和屋に、劣らぬ筑波の山崎屋。高い同士に高島屋が」（一一九頁）というせりふが、「当時名うての売出しと」となっているように、楽屋落ちや、初演時の役者個人に対する特定の褒め言葉を欠いている。③「高麗寺裏手の場」に、一カ所、「寿美之丞上手より出て」とあり、市川寿美之

丞がお坊吉三を勤めたときの横書き本である。その寿美之丞が、もし初代ならば、安政七年正月以降、彼が三世沢村国太郎と改名する慶応二（一八六六）年春までの期間の上演本、もし二代目ならば、明治十一年ごろから、彼が没する十七年五月までの間の上演本と考えられる。

〔用　字〕

一、本文の作製に当っては、読み易さを考慮して、適宜、漢字を仮名に、仮名を漢字に改めた。
二、旧字・別字・俗字・異体字に関しては、すべて現行の漢字に改める。
三、仮名遣いは、『新潮日本古典集成』の原則に従って、歴史的仮名遣いを採用したが、近世後期慣用の仮名遣いを一部に併用した。
四、記号の処理は、以下の通りとした。
(i)反覆記号は、「々」と「〳〵」に限定する。(ii)句読点は、底本にはなく、校注者の判断によって付ける。(iii)節記号「〻」と、思い入れを表す「○」、及び、仕出しの役名に用いられる「○・□・△・▽」は、底本に準ずる。(iv)せりふの中の引用文には「　」を、また、浄瑠璃名題には『　』を付ける。

〔役　名〕

一、底本のせりふやト書きにおける人名は、役者名で記されているが、それをすべて、役名に変えた。
一、各幕の冒頭に記載される役人替名（配役一覧）の、役名の掲出順序は、せりふの発言順とする。
一、底本の役人替名の内、第一番目序幕の海老名門弟と非人、大詰の鬼、第二番目二幕目の禿、三幕

目及び大切の捕手は、役者名はあっても固有の役名を欠く。底本の冒頭（連載第一回目）には、語り・大名題・四枚・浄瑠璃名題の外に全体の役人替名が掲出されているが、それによっても、判明する役名は禿のみで、他はいずれも確認することができない。そもそも鬼と捕手の記載はなく、門弟・非人の役人替名は本文中のそれと齟齬（そご）しているからである。従って、それらの役名は、鬼・捕手の場合同様「一、二、……」の数字によって表示した。以下、役人替名を対照しておく。

門弟

役者名	冒頭の役人替名	本文の役人替名
関　松次郎	海老名の門弟甘縄丹平	門弟三
坂東大作	〃　腰越伝内	
関　花平	〃　由井伝吾	
坂東三太郎	〃　片瀬竜蔵	門弟一
嵐　島八	海老名の下部しやこ平	門弟二
市川新作		門弟四

＊底本ト書きには「三太郎島八松次郎新作袴大小何れも門弟の形りにて」とある。

非人

役者名	冒頭の役人替名	本文の役人替名
市川米平	非人ひよろ竹	非人二
市川春蔵	〃じやがたら伝次	
中村竹助	〃つんぼ兼	
松本小かん子	〃白茄子かん蔵	
坂東八作	〃新米の八	
坂東元蔵	〃小僧熊	
中村鴻蔵		非人一
市川麦蔵		非人三
坂東太市		非人四

＊底本ト書きには「鴻蔵米平麦蔵太市皆々非人の拵へにて出て来り」とある。

〔注　釈〕

一、注釈は、傍注と頭注から成る。

一、傍注は、現代語訳を主とし、読者が、本文を気楽に読み取れるよう配慮した。しかし、スペースの関係上、一部を頭注に移した場合もある。

一、傍注の内、主語などの語を補う場合には〔　〕を使用した。

一、「○」（思い入れ）の内容を推測し、（　）に入れて傍注とした。

一、頭注には、大別して四つの内容を盛り込んだ。すなわち、①太字で示した場面の表示、②場の表示の直後に二字分下げて掲げた場面の内容の要約、③語句の注および難解な文の読解、④＊印以下に掲げた、読解の参考に資するためのコラム風の記事。

一、本文の見開き二頁分に該当する頭注は、必ずその二頁の中に収まるよう配慮した。

一、大道具・小道具・衣裳・鬘・鳴物に関しては、可能な限り、初演時に近い史料に基づいて記した。従って、現代のものとは違う場合があることをお断りしておく。

一、その他、演出上の諸点に関する注は、すべて、筆者の本文理解に基づくもので、現行の演出とは一切無関係である。

〔解　説〕

一、巻末に、作品の理解の一助ともなるようにと願って、解説を付した。作者河竹黙阿弥の小伝と、『三人吉三』の内容及び戯曲構造に関する小論を骨子とする。

〔付　録〕

一、巻末に、付録二点を添えた。

(1) 影印、「江戸三座芝居惣役者目録」――『役者商売往来・下』（安政七年正月刊）所収。

(2) 翻刻、河竹黙阿弥著『狂言作者心得書』。

おわりに

頭注作業を進める間に、理解し難い、あるいは、実態の把握し難い語句に、しばしば出会った。楽屋落ちの洒落や、初演時には知られていたはずの店名・人名・地名などに関するものが、その大部分である。上原輝男（玉川大学）・小池章太郎（前進座）・斎藤和夫（藤波小道具）・鈴木栄三（白梅学園短期大学）・田中伝左衛門（歌舞伎囃子方）・永井啓夫（日本大学）・藤波隆之（国立劇場）・山田泰弘（鎌倉国宝館）各氏のお知恵を拝借し、数件を明らかにし得たのだが、なお、多くの語句を「未詳」のままに残さざるを得なかった。諸氏の御厚情に篤く感謝するとともに、大方の御教示を願う次第である。

多忙な筆者に代わって、快く図書館に足を運んでくれた玉川大学講師法月敏彦、今回特別に作製した翻刻要領に則って、本文筆写の労を引き受けてくれた教え子の小川知子両君に心から感謝する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三人吉三廓初買

一　十八世紀末以降、江戸歌舞伎では、一日の演目を、一番目（時代物）と二番目（世話物）とに分けて上演した。本作初演は安政七年（一八六〇）一月十四日市村座。

二　以下、鎌倉と江戸の固有名詞が交錯する。内容はもちろん江戸の話だが、時代は源頼朝の治下、事件の起る土地は鎌倉。これは、初春興行には曾我物を上演するという江戸歌舞伎の慣例に従って、全体を曾我十郎・五郎の世界に設定したための処置だが、同時に、現在の人名や事件を脚色してはならぬという禁令から生れた近世固有の劇作法――過去の事件に託して現代のドラマを展開するという、二重構造の劇作法を踏襲した結果である。

三　最下級の役者。正しくは下立役、俗に「稲荷町」「お下」ともいう。

四　端役の中でも、最も軽い役の称。役名は○□などの記号で表示された。

五　刀剣の研磨を専らとする者を研師、庖丁や小刀の研ぎ、鋸の目立てなどを行う者を研屋と、区別していう習慣もあったようだが、与九兵衛は、刀の研ぎを職としていながら文中では研屋とも呼ばれていることを見ると、その区別も明確なものではなかったらしい。

六　与九＝欲。欲の深さを示唆する名前。

七　三八頁注四参照。

第一番目　序幕

二 荏柄天神社内の場
同松金屋座敷の場
笹目が谷柳原の場
同　新井橋の場

役人替名

一 茶屋の亭主　三 若い衆
一 四 仕出し四人（○、△、□、×）　若い衆
一 五 研師　六 与九兵衛　松本国五郎
一 七 烏貸し　鷺の首の太郎右衛門　坂東村右衛門
一 木屋文蔵（文里）女房　おしづ　吾妻市之丞
一 文蔵倅　鉄之助　中村栄蔵

一　雑用や台所仕事をする召使いの女。上女中に対していう。

二　職人の家や商家に奉公する少年。小僧。

三　紅屋には、紅染めを業とする者と、化粧用の紅を商う者とがあり、与兵衛がそのいずれであるか、本文には説明がない。しかし、お七・吉三を扱った脚本の伝統に従えば、化粧品店を営んでいるものと推察される。

四　「凡例」の内、「役名」の項参照。

五　江戸時代、武家に仕えた身分の低い家来。年齢の別を問わない。二六頁注六参照。

六　松金屋の誤植か。

七　料理屋や娼家に奉公する下働きの女。下女。勝手仕事をする下女は含まない。

八　商家で、丁稚や小僧の元服した者の称。

九　夜間、街頭で売春する私娼の一。天保の改革で一時廃絶したが間もなく復活。

一〇　「おてふ」は、ふぐの毒のある卵巣の俗称〈蝶〉を、虎鰒の縁で名としたもの。

一一　吸い付いたら離れないの意。なお女陰の名器を蛸壺・蛸巾着などという。

一二　彼岸の沙魚は中風の薬になるという。中風にかかった婆あ夜鷹の意を示す名か。

一三　「牛夫」とも「牛」とも書く。ここは、夜鷹宿に同居して客引きや用心棒を勤める男のこと。

一　木屋の下女　おちせ

一　木屋の丁稚　三太

一　紅屋　与兵衛

一　海老名軍蔵

一　海老名の門弟　一

一　海老名の門弟　二

一　海老名の門弟　三

一　海老名の門弟　四

一　安森源次兵衛の次男　森之助

一　安森の若党弥次兵衛倅　弥作

一　松倉屋の女中

一　木屋の手代　十三郎

一　夜鷹　虎鰒のおてふ

一　夜鷹　うで蛸のおいぼ

中村武次郎

坂東徳太郎

坂東又太郎

市川米十郎

坂東三太郎

嵐　島八

関　松次郎

市川新作

市村竹松

市川白猿

岩井扇之助

市村羽左衛門

嵐　吉六

市川小半次

一四「剣の峰」の略。剣突ともいう。乱暴な口をきくこと。荒っぽい口調、とげとげしい言葉で人に当ること。

一五 江戸時代における最下層の身分の称。また、その身分に属する人々。凡例参照。

一六 中間の異名。中間は次頁注八参照。

一七 中心となる演技空間。歌舞伎の舞台は、方三間の能舞台を母胎とし、前面及び左右の側面に、漸次、面積を拡大。その根本となる舞台を「本舞台」と呼び、装置の指定に際しては「本舞台三間の間」と書くのを常とした。

一八 客席から舞台に向って、右を「上手」、左を「下手」と呼ぶ。

一九 絵馬などを掲げたお堂。

二〇 貯水槽。

二一『横本』には、「前」。

二二 簡素な茶店。

二三 出茶屋の柱に掛ける「御せんじ茶（煎茶）」と記した、角型の掛け行灯。

二四 横長の簡単な腰掛け。毛氈などを敷く。

二五 単位呼称。

安森源次兵衛は、源頼朝から預かる短刀庚申丸を海老名軍蔵に盗まれ、責任を負って切腹。妻は病死し、長男吉三郎は出奔。娘お元は身売りして、今は、一重と

一　夜鷹　婆ア　おはぜ　　関　孫六

一　夜鷹の妓夫　けんのみ権次　　市川米五郎

一　紅屋与兵衛倅　与吉　　関　花助

一　土左衛門爺イ　伝吉娘　おとせ（一とせ）　　中村歌女之丞

一　非人　一　　中村鴻蔵

一　非人　二　　市川米平

一　非人　三　　市川麦蔵

一　非人　四　　坂東太市

一　折助　　若い衆

本舞台、三間の間、上手へ寄せて額堂。これに色々の額を掛け、この前に、梅鉢の紋付きたる鉄の用水桶。額堂の内、出茶屋。御せんじ茶の行灯を掛け、床几二、三机、並べあり。これに続

いて、下手、丸物の石の鳥居、同玉垣。この内、紅白の梅の立ち木。日覆より同じく釣枝。鳥居の内、茶見世、楊弓場の片遠見。すべて、荏柄の天神境内の体。ここに若い衆、町人・中間の仕出し、床几に腰を掛け、これへ若い衆の茶屋の亭主、茶を出しゐる。この模様よろしく、大拍子にて、幕明く。

亭主　皆さま、良う御参詣でござります。お茶を一つ、お上がりなされませ。

ト、皆々へ茶を出す。

○　ナント、今年は天気都合のいいので、盛り場は仕合はせな事ぢやアないか。

△　さうとも〳〵。それに、この天神の境内は見晴らしがいいから、きつい繁盛だの。

□　コウ、繁盛と言へば、この頃噂の高い、笹目が谷の柳原に、おとせ

いう遊女になっている。若党弥次兵衛父子は、次男森之助を養いながら、庚申丸の行方を詮議。庚申丸は、すでに木屋文蔵（文里）が売る予定をしていたが、海老名は、出世の種にしようと、それを百両の金で買い戻させる。文蔵は一重に惚れて廓通い。妻おしづは、心を痛めている。

一　パネルではなく、立体的に作る大道具。

二　垣。「玉」は美称。

三　舞台前面上部の称。

四　日覆から釣り下げる樹木の枝。

五　矢場ともいう。楊弓とは、小型の弓で短い矢を射、的に当てる遊び。料金（三十矢で六文）を取って、楊弓をさせる店が楊弓場。

六　舞台後方、左右いずれかに飾る道具。

七　鎌倉市二階堂にある、菅原道真を祭った古社。ただし、ここでは、江戸の湯島天神（文京区湯島三丁目）を示唆している。

八　武家の下僕。士分には属さない。

九　神社の場などに用いられる鳴物の名称。

一〇　昔は上手から下手へと開けた。今は逆。

一一「笹目が谷の柳原に、この頃噂の高い」。

一二　江戸吉原の娼家には、大見世・中見世・小見世などの別があった。まじり見世とは中見世のこと。二級の遊女を置いていた。

一三「新艘」とも書く。姉女郎に従う見習い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com